

04・朝からオナニー告白されて、ぬるぬるおま●こについて解説させてから指ハメガチセツクスで連続絶頂させてあげる

『03・[耳舐め] おやすみ前のあまあま耳舐め手マン』の翌日の土曜日、朝六時ごろ。天気は晴れ。気温も心地よいあたたかさで、とてもよい春の朝だ。

場所は主人公の自宅内寝室の、ベッドの上。

主人公、イヴの隣で、すびすびと気持ちよく眠っている。

しかし、外が明るくなってきた頃、ようやく目を覚まし、もごもごと動き出した。

それから、横になつたまま、く一つと伸びをして……昨日の出来事を辿ろうと、頭を巡らせる。

（主人公）

「ふわあ……」

あー……よく寝たなあ。もう土曜日かあ。

——それにしても、昨日はよかつたなあ。

飲み会は色んな学校の先生が居たからちよつと不安だつたけど、無事に終わつて。

タクシーの運転手さんは優しくて。

マンション着いたらイヴちゃんが待つててくれて。  
変装イヴちゃんかわいくて。

それから二人で一緒に帰つて。

その後は、一杯甘えさせてもらつて。

玄関でおっぱいちゅうちゅうさせてもらつて。いかせてもらつて。  
お風呂入つて。お風呂ではお返しにたくさん色々してあげて。  
寝る前も、お布団でもすっごい気持ちよくしてもらつて。

とにかく素晴らしい。最高の夜だつたのです。

あとそれから、それから……。  
んん？

えーっと。……あれ？

主人公、布団の中で『おや?』と首をかしげる。

最高に素晴らしい夜の記憶はそこで途絶え、そこから先の事が、何も思い出せないので  
ある。

主人公はイヴとした事なら、どんな事でも記憶している自信がある。  
だが昨夜に関しては、ここまでしか覚えていない。

という事は、もうそこから先は特に何もなかつたという事だらうか？

うーん。

うーん。うーん。

……覚えてないな。

多分、お布団で気持ちよくしてもらつて、そのまま寝て、今起きたつて事だよね。

……で、いいんだよね？

SE1 イヴが布団をめくる音

【最初から最後まで流す】

と、主人公が不安な気持ちになつていると、イヴがこちらに気づいたようだ。  
主人公が起きたかどうか確認すべく、こちらを覗き込んでくる。

●中央 至近距離

「とても甘々で、浮かれた感じで。

これから一日中、主人公と過ごせる事が嬉しくてたまらない」

あー♥ 起きたあ♥

おはよ。先生♥

【※3回※ キスする。

甘々に『いかにもキス』という感じの音を立ててキスする】  
ちゅ♥ ちゅ♥ ちゅつ♥

〈主人公〉

「おはよう♥」

わく♥ イヴちゃんだく♥」

S E 2 二人が布団の上で抱き合う音  
【最初から最後まで流す】

主人公、記憶があいまいな事をさつく忘れ、イヴに抱きついて甘える。

昨日の出来事は一部はつきりしないが、とにかく一杯イヴに優しくしてもらつた事は覚えている。

幸せだった。あれもこれも、最高に良かつた。

ああ、年下ママ系彼女最高……♥

そんな事を思いながら、抱き合つてごろごろする。

対するイヴも、相當にご機嫌のようだ。  
朝からハイテンションである。

● 中央　至近距離

「うきうきと浮かれて。いかにもバカツプルという感じの会話を楽しむ】  
そうだよ。イヴだよ♥」

イヴ、くすくすと楽しげに笑いながら、主人公の左耳にささやく。

● 左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと嬉しそうに。

これが眞相で、のちの発言とは矛盾する事になる】  
ねえ。先生すごいね。めっちゃ寝てたよ♥」

〈主人公〉

「あらつ。今何時？」

という事は、昨日はやつぱり、お布団えっちの後から夜明けと思われる今まで、ずっと寝てたって事でいいのかな？

いや、それとも逆に『めっちゃ寝てた』って言われちゃうほど、めちゃくちやに寝てた？  
て事は、今つてお昼過ぎの可能性もある？

……とりあえず、時刻の確認をせねば。

主人公、イヴの『めっちゃ寝てた』という言葉に、納得したような、驚いたような、とにかく混乱した気持ちで、ひとまず時刻を尋ねる。

するとイヴは、特に時計を見る事もなく、そのまま答えを教えてくれる。

まるで、今がおおむね何時かわかるほど、ずっと起きていたような感じである。

### ● 中央　至近距離

「さらっと、すんなり答える。

時計を見なくとも、時刻をおおむね把握している】

んー？ えっとね♥

まだ六時とかだよ。

土曜でよかつたね♥　まだまだ寝れるよ♥」

（主人公）

「六時、かあ……」

あ、そおなんだあ……。とりあえずお昼過ぎではなくて良かつたあ……。

主人公、領き、寝すぎてはいな事に安堵しつつも、いまひとつピンと来ない。寝る前の記憶がすっぽ抜けているせいで、それほどまでの時が過ぎた実感がないのだ。その結果、なんだかまるで、ごく短いタイムワープをしたかのような気分になる。

●中央　至近距離

〔だんだん近づいてくる〕

んー？

〔ゆっくりと。語尾はあまり上げない〕

もしかして、昨日の事、あんま覚えてない？

なぬ！

もしかしてやっぱり、わたし、何か忘れてる事があるのかな？

なので主人公は、イヴの口ぶりに『やはり……?』と身構える。

とはいっても、大した事はしていないはずだ。

だが、記憶がないという事は、思つた以上に不安になるものである。

主人公が続きを聞こうとおそるおそる身を乗り出すと、イヴはまるで、決して人に聞かれてはならない話を始めるかのように唇を耳に寄せ、ひそひそと話し出した。

●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「[ここから※マークまで、ゆっくりと、ひそひそと、大変な内緒話をするように話す]  
あのね。

【一呼吸あけてから。にやにやと。

これからあからさまな嘘について、主人公をびっくりさせようとしている  
凄かったよ？

【一呼吸あけてから。にやにやと。

ひそひそと嬉しそうに、ありもしないセックストピソードを捏造し始める】

昨日はね。夜も一杯したのに。夜中ももつとしたよ。

私が泣きながら

【ここから】でくくった部分は、イヴの作り話。

しかし『』の部分も、ほぼ普段の口調で、いつも通り読む。

本人的にはえっちな嘘喘ぎをして主人公をドキドキさせようとしているが、演技の才能がない上、普段の話し方が平坦すぎて嘘喘ぎとは相性が悪い。

結果、わずかに『わざとらしい』『嘘喘ぎっぽいかも』と思える程度で、ほとんどいつも同じ口調になる。

しかし主人公には、かえつてそれが『本当の事を言っているのかも!』と感じる根拠となる

『もう無理♥ もういくのやだあ♥』って言つても全然やめてくれなくて。

【『シャワーの時はシャワーで』『シャワーから戻る時は廊下で』と、二回えっちな事をされているという意味】

シャワーの時も、シャワーから戻る廊下でもえっちな事してきてさあ。

【『せめてベッド行こ?』は、少しだけ甘えて、懇願しているような感じで】

『せめてベッド行こ?』ってお願ひしても無視で。

廊下の壁に手えつかせて。

立ちバックで私のナカ、ぐちゅぐちゅしてきてね?】※

〈主人公〉

「……！」

主人公、衝撃の告白をされて、ごくりと息をのむ。

イヴちゃんの事を、イヴちゃんの都合お構いなしで犯しまくるわたし……！  
わた……し……？

……？ ……？

……果たしてそれは、本当に現実に起きた事なのだろうか。  
主人公、普段の自分とはずいぶんとかけ離れているエピソードに、思わず首をかしげて  
しまう。

だが、昨日は酔っていた。正気ではなかつた。  
だからもしかしたら、条件が整えば、それ位の事はする可能性はある。  
なので主人公は、とりあえず想像してみた。

酔つてタガが外れている自分と、そんな自分にめちゃくちゃにされているイヴ。  
それから、繰り広げられる、主にアダルトフィクションの世界に生息していそうな激しいセックスを。

それはどんなに緻密にイメージしても想像の世界を飛び出す事はなく、記憶とは、まるで結びつかない。

だが、こう見えてイヴは、そういうプレイが大好きだ。

本人はバレてないと思い込んでいるのだろうが、校内で友人とこそそそくなコミックを貸し借りして楽しんでは、鼻息をふんすふんすさせている事を、主人公は知っている。つまり、むつりないのである。

だから身に覚えはないが、もし昨夜イヴから『そういう事をしてほしいオーラ』を感じとったならば、主人公は応じていた可能性がある。

だからそうなつた事自体は問題ない。むしろ、そんなおいしい展開を、当事者である自分がまるで覚えていないという事こそが問題である。

●●左　さきやき　※マークのセリフまでさきやく

「【※1回※　耳にキスする。

作り話を聞かせているだけなのに、もう興奮してくる。

また、主人公が真に受けて早速ちよつと興奮した様子なのが嬉しい】  
ちゅ♥

【少しだけ甘々に、主人公をえっちに非難するような感じで。

しかし、話している内容はもちろん嘘である】

すぐそこ玄関なのに。外と、ドア一枚しか隔ててないのに。  
私、何回も何回も犯されて。

【『あんあん♥ あんあん♥』はちよつと演技を頑張る。

多少はわざとらしく、嘘喘ぎらしくなる】

『あんあん♥ あんあん♥』 つて鳴かされたんだよ♥】 ※

（主人公）

「…………!?」

えっ！ いいなあ！ それ！

立ちバツクで犯されてるイヴちゃんはやばい。

絶対可愛いし、絶対えっちに決まってる！

主人公、ますます興奮してくる。

どう転んでも、イヴをめちゃくちゃにする自分の事はうまく想像できない。  
だが、めちゃくちやにされているイヴが絶対に可愛いという事はわかる。

主人公は想像する。

主人公に腰をしつかりつかまれ、逃げる事もできずに指を深く押し込まれて。  
かと思いきや、何度も、何度も、容赦なく出し入れされて。

目を潤ませ、恨めしそうなフリをしながらも、どう聞いても嬉しそうな、高く可愛い声  
であんあん喘ぐ、イヴの姿を。

それから、

そんな素晴らしい出来事を覚えていないなんて、なんてもつたいない……！  
ああ、やっぱりだめだ。お酒はダメだ。今度こそ絶対にやめよう。

いや、お酒を飲んでいたからこそそんな展開になつたのかも？

と、すっかり話を真に受けて、妄想をさらに広げていく。

この話にはどうも現実味がない事よりも、えっちなストーリーとして興味をそそるとい  
う事に、完全に注意が行つてしまつていて。

●●左　さきやき　※マークのセリフまでさきやく

「語り口がノつてくる。にやにやと。

作り話をしているうちに、あたかもそれが本当にあつた出来事かのような気がしてきた。  
また、自分が普段しているえっち妄想を主人公に打ち明けるのは、なんだか幸せな気分】  
先生、すっこい意地悪だった。

私の弱いとこばつか、ねちねちいじめてきてさあ♥

【ぼそっと。昨日の『お風呂での』セックスを思い出しながら話している。  
これは本当の事なので、作り話にも、急に真実味が増す】

まだお腹の奥、熱い感じするもん。

【多少は演技がうまくなる。

ノリノリで嘘喘ぎするが、それでも『多少』程度の上達である】

先生、ちゃんと私が『好き♥先生好き♥イク♥イクイクイク♥イツくう……』  
♥』ってガチイキしたの、覚えてる?』※

〈主人公〉

「嘘……♥ やばいじやんそんなの♥」

主人公、さらに激しく興奮してくる。

い、今からでもそれしたい。

もう一回イヴちゃんと、そういう濃厚系えっちしたい……！

と、強い欲望がむくむくと沸き上がり、はあはあと呼吸が荒くなつてくる。  
イヴもまた、そんな主人公を見てご機嫌、かつ発情気味のようだ。

とろけた瞳で、主人公をにやにやと、嬉しそうに見つめてくる。

イヴ、主人公の顔を見るために、一度正面に戻る。

### ● 中央　至近距離

【※ひそひそ声※】で。

少しにやにやと。普段通りの口調で話したいが、もうにやにやが止まらない】  
そうだよ？ やばいよ？  
なのに覚えてないの？

【一呼吸おいてから。

『まさか、信じてないなんて事はないよね？』という感じで】  
もしかして、嘘だと思った？】

〈主人公〉

「それはあ……♥」

にわかには信じがたい話だつたが、もはや真相はどうでもよかつた。  
朝からイヴが、いかにもえっち目的の、えっちに誘導するための話題を振ってきた。

主人公はそれが嬉しいし、ぜひともこのままこの誘いに乗って、セックスがしたい。  
それ以外の事は、すでに些事なのである。

●中央　至近距離

「一呼吸おいてから。

しつと。あつさりと、だが嬉しそうに】

そう。嘘♥

【※1回※　キスする。

嘘をついた事をキスで誤魔化すようなキス。

だが主人公は、イヴの作り話を聞いているうちにすっかり乗り気になつていて】

ちゅ♥】

〈主人公〉

「やつぱりい……♥」

だから、嘘だと告白されても、何の影響もない。

問題は『なぜイヴがそんな嘘をついて、これから主人公をどうさせようとしているのか』  
という事だけだ。

どう考へても理由は一つだが、万が一そうでないという可能性もある。

とにかく早くそのへんをはつきりさせて、えつちしたい。  
早くイヴちゃんといちやいぢやしたい！

そんな思いに、主人公は満たされていく。

### ●中央　至近距離

「にやにやと嬉しそうに。

主人公が『まずは驚く。それから、興奮したようにもじもじ、にやにやとし出す』とい  
う、理想の展開になつてきただので】

ふふふふ♥　全部今思いついた妄想。

【※1回※　キスする。

完全にセックスに誘つているキス。

作り話を聞かせて いるうちに、セックスしたくてたまらなくなつてきた】

ちゅ♥

【悪びれもせず、真相を話す】

ほんとは先生が覚えてる通りだよ。

先生は昨日、玄関でイツたらますます甘えん坊になつてお風呂入つた後、私にお布団でお耳気持ちよくされて、そのまますぐ寝ちゃつたよ。で♥ 今起きたの』

〔主人公〕

「そうだつたのかあ……♥」

……なんかおかしいなあと思つたけど、やつぱり嘘だつたんだあ……♥』

だが、万一の可能性については考えなくともよさそうだ。

イヴは相変わらずいやらしい単語を連発してこちらを煽つてくるし、同時に主人公の髪や手に触れて、いちいち欲望を刺激してくる。

主人公はこのままにやにやと焦らされながら、時が来るのを待つだけでいいようだ。

●中央 至近距離

「とても嬉しい。主人公が自分の嘘に怒るどころか、むしろ嬉しそうなので

はは♥ 残念がつてる♥

〔にやにやと嬉しそうにたずねる〕

そういうの、本当にしたいと思つた?』

（主人公）

「思つた♥　なのに現実は寝てたなんて、情けなさすぎるよ♥

ごめんね。淋しかつたでしよう。

あのね、だから今日はそのお詫びに、何でもしたい事してあげる。  
一杯いやいやしたり、遊んだりしようね♥」

● 中央　至近距離

「わかりやすく声が弾む。言質を取った気分】

ほお♥』

その時、イヴの瞳がわかりやすく輝いた。

主人公は知っている。これが言質コレクター、イヴの本領だ。

主人公はこれから、この言葉を盾に、本当に一日中、本当に色々な事をさせられるだろう。

主人公自身、それを承知の上で発言しているのだから、手に負えない二人だ。  
なので主人公はノリノリで、さっきまでよりもますます甘いトーンで返事をしてみた。

（主人公）

「そ、うだよ。いくらでも甘えていいからね♥」

●中央　至近距離

「にやにやと嬉しそうに。

へくえ  
♥

【にやにやと嬉しそうに。

当然のように、主人公が特に許可していない『今日はそういうのしてもいい』・『先ほど

の妄想のような、激しいセックスをおねだりしてもいい』という事項を追加する】

寝ちゃってたお詫びに、今日は本当にそういうのしてもいいし、いくらでもイチャイチャ

したり、甘えたりしてもいいの？

何でも言う事聞いてくれるの？】

（主人公）

「うん♥」

そう。本当にいくらでも甘えていいのだ。

たくさんわがままを言つていいし、他の人にはとても頼めないような事も、主人公には

頼んでいいのだ。

だつて主人公は両想いになつた日、イヴにこう言つた。

『外では当面恋人らしい事ができない分、家では我慢しなくていい』と。

その結果、イヴはこの半年でますます素直になつて、ますます正直に欲望を打ち明けてくれるようになつた。

主人公はそれが可愛いし、いとおしいし、イヴにはずっと、今のようにのびのびとしていて欲しいと思っているのである。

……まあ、イヴの願いが想像以上にえっち方面メインだったために、ごくピュアな恋愛をしていたはずの自分達は、ずいぶんと様変わりした。

具体的にはすっかりセックスしまくりのえっちなカツプルになつてしまつたわけで、これに関しては、かなり想定外だつたが……。

主人公は幸せだ。また、イヴもきっと同じ気持ちでいてくれていると思つている。

### ● 中央 至近距離

「にやにやと独り言のように。言質をとれて、とても嬉しい」

そつか。そうか。そつか……♥

【甘えた声】

だんだん顔を近づけながら話しているイメージ】

それって……。

【※1回※ キスされる。軽く唇を重ねられる。  
顔を近づけて話していたら、そのまま頬に手を添えられてキスされるイメージ】  
ん♥】

主人公、物欲しげに顔を寄せてくるイヴを寄せて、キスをする。

●中央 至近距離

「★【※20秒※ キスする。

朝から濃厚な『それじゃあ、今からセックシよ♥』と誘っているようなディープキス】

★★★

ん♥ ん♥ ふ♥ んつ♥ んー……♥ れろつ……くちゅ♥ ちゅるつ……ぶちゅつ  
♥ れろつ♥ れろつ♥ くちゅつ……♥

【唇を離す音を、露骨に立てる】

ちゅるつ♥

【※2回※ ゆっくりと呼吸する。興奮氣味に】

はあ……♥ はあ……♥

【少し間をあけてから。

にやにやと嬉しそうに]  
こんな風に?』

〈主人公〉

「そう♥ こんな風に♥』

それからぎゅっと抱きしめて、仲よく布団にくるまる形でじやれ合う。

●中央 至近距離

〔上機嫌で笑う。ものすごく嬉しい〕

ふふふふ♥

〔甘ったるく喘ぐ。〕

不意打ちで少し驚くが、ものすごく嬉しい】

あ♥

〔※3回※ キスされる。短いながらも、しつかり攻められるキス〕

んー♥ んつ♥ ふ♥

〔高く甘く喘ぐ。とても嬉しい。〕

主人公が当たり前のようにお尻を触っているので】

あ♥ ひや♥

【少し間をあけてから。  
甘々に抗議する。本当は、もちろん触つてほしかった】  
てか先生、もおお尻触つてるし……♥』

主人公、イヴのお尻に手を伸ばすと、太もものさらさらの感触と、ぱんつごしのお尻の  
すべすべした感触を、交互に堪能する。

イヴはぱんつこそ穿いているものの、パジャマの下は穿いていない。  
寝る時は穿いていたはずだから、主人公が起きるまでの間、何をしていたかはお察しだ。  
なぜならイヴは性欲が強い。

具体的には、さつきからもじもじと主人公に股間を擦りつけてきており、えっちにお尻  
をふりふりしている。

おそらく無意識なのだろうが、その無意識はちょっと卑猥すぎる。

ならば、そんなお尻は触るのが当然だし、これから、なぜかクロツチの部分だけ妙に滑  
りが悪く、湿っている事を指摘しなくてはならない。

イヴは、こちらが疲れている時、弱っている時は優しいママになってくれる。

だが、こちらが元気な時は、遠慮なく甘えて性欲をぶつけてくる、すけべ女子である。  
主人公はそのギャップがたまらない。

ママなイヴには甘えたいし、すけべ女子の時のイヴの欲望には全部応えたい。

だから後者になつて いる今は、求められる事にはすべて応じて、イヴを昨日よりもさら  
にえつちな女の子にするまでやめないのが、恋人としての務めだと思つて いる。

〈主人公〉

「イヴちゃん だつて、おまんこ擦りつけてきてるじゃん♥ えろー♥」

●中央 至近距離

「甘々に媚びた声で。バレバレの嘘をつく」

え？ 私は擦り付けてないし。もぞもぞとかしてないし♥

【甘々に媚びた声で。明らかにセックスしたがつて いる様子で】  
別にえつち、したくないから♥】

〈主人公〉

「そ うなの？ わたしはしたいけどなあ……♥」

だから主人公は、バレバレの嘘も今は指摘しないでいてあげる。  
あくまで『どうしてもセックスしたいのはわたしです』といつて いで、イヴにセックス

のおねだりをする。

イヴは信じられないほど性欲旺盛なくせに、妙な所で恥ずかしがる。

ゆえに主人公は、そんな彼女が、好きなように行為に熱中できるように、手伝つてあげるのが正解なのだ。

●中央　至近距離

「あからさまに嬉しそうに。

誰が聞いても『私もしたい♥』と言つているようにしか聞こえない感じで】

え？　先生はしたいの？

【にやにやと。

主人公を『変態』『エロい』とからかう事で興奮したいし、じやれつきたいだけ  
変態。朝からエロすぎ♥

★【※10秒※　キスする。

『イヴちゃんだつて本当はしたいんでしょ♥』と言われているようなキス】★

ん♥　ん♥　んー♥　ふ♥　ん♥　んう……♥

【※3回※　少し荒い呼吸をする。

だんだん興奮して、期待している  
ふー。ふー。ふーつ……♥】

そんな主人公に煽られて、イヴも相当昂ってきたようだ。

だんだん呼吸が荒くなり、目がとろんと据わつてきている。

それから、そろそろ何かの頃合いだと感じたのか……少し恥ずかしそうに、でも言いたくてたまらない様子で、こんな事を打ち明けてきた。

### ●中央　至近距離

「媚び媚びの甘えた声で。もじもじと。

主人公が起きてからずっと、いつ伝えよう、いつ伝えようと思つていた事を打ち明ける。  
主人公相手なら、どんなえつちな話題でも我慢せずに話せるのが、とても嬉しい】

あのね♥

【※1回※　キスする。

完全にセックスに誘つているキス。

作り話を聞かせていくうちに、セックスしたくてたまらなくなつてきた】  
ちゅ♥

【媚び媚びの甘えた声で。少し恥ずかしそうに。

主人公相手なら、我慢しなくていいのがすごく嬉しい】  
ほんとは♥

【※1回※ キスする。

完全にセックスに誘っているキス。  
作り話を聞かせているうちに、セックスしたくてたまらなくなってきた  
ちゅつ♥

【少し恥ずかしそうに、もじもじと】

昨日あんないしたのに、全然足りなくて】

S E 3 イヴが主人公に近づく音

【最初から最後まで流す】

イヴ、主人公の左耳に唇を寄せると、そのまま、ひそひそとささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【媚び媚びの甘えた声でささやく。とても恥ずかしいが、言いたくてたまらないし、言え  
ば主人公が喜んでくれるだろう事を理解している。

『してたの』とは『オナニーしてたの』の略】

一人でしてたの……♥

【少し間をあけてから。

媚び媚びの甘えた声で。

本格的にえっちな気分になつてきたのもあり、先ほどよりわずかに演技できるようになつて いる】

さつきみたく『あんあん♥ あんあん♥』つてしまながらね？

寝てる先生の顔見ながらイツたよ？

【媚び媚びの甘えた声で。

少し恥ずかしそうに。

これまでさんざんえっちな発言をしていたのに、ここにきて急に恥ずかしがる】

今もね。自分で勝手にエロい事言つて、勝手にエロい気持ちになつちやつた……♥】※

S E 4 イヴが服をたくし上げる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「…………♥」

イヴ、言い終えるなり、パジャマにしているTシャツを自分からまくり上げ、何もつけていない乳房をさらす。

すでに乳首は勃起しており、固く盛り上がっている。

だが、主人公がこれに目を奪われている間に、イヴはたたみかけるように誘惑してきた。

●中央

「媚び媚びの甘えた声で。

ほら見て……♥

【少し恥ずかしそうに。

『してもらえる』とは『触つてもらえる』という意味】

すぐ先生にしてもらえるようになんとノーブラ、だし。

ぱんつも。ほら」

S E 5 イヴが足を開く音

【最初から最後まで流す】

●中央

「媚び媚びの甘えた声で。

こんなぬるぬるになつてるよ……♥」

主人公、そんなイヴの姿に激しく欲情しながら、生地が濃く変色するほど濡れそぼつた、イヴの股間を凝視する。

だつて、一度はあきらめようとした元片想い相手が、恥ずかしい部分を、自分を興奮させるためだけに露出して。

その上、甘つたるい声で濡れ具合を解説しながら見せつけてくるのだ。

そんなものは絶対見るし、昨日もこれと同じ光景が繰り広げられていた事を思うと、イヴの事が可愛くてたまらなくなる。

つまりこうする事は、イヴの必勝パターンなのだ。

主人公、思う。

——あー、イヴちゃんかわいい。かわいいよお……。

こんなのダメだ。こんなの、朝から指ハメずぼづぼセックスの刑だ。

……ていうかもう、イヴちゃんつて子はさあ。

えつちしたくなつたら、すぐこうやつておっぱい見せてくるんだよなあ！ 昨日もそうだつた！

おっぱい出したり、ぬれぬれおまんこ見せたりしたら、わたしが喜んで飛びついてくると思つてるんだよ。飛びつくけど！

まつたくイヴちゃんって子は、えっちの誘い方がゴリ押しすぎる。

何が何でもえっちしたさ過ぎて『こうすれば絶対勝てる』って方法を、平氣でガンガン連発してくる。

そのワンパターンさと必死さが可愛すぎて、いとおしすぎて。わたしはなんでもしてあげたくないっちゃうよ……。

と。

### ● 中央

【高く甘い声で、びくつと喘ぐ。指の腹で、さっそく乳首をなぞられたので】

あ♥

### △ 主人公

「ほんとだ。ガン勃ちじやん♥　えっちすぎ♥  
まだ触つてないのに、もうぶくつとしてる♥」

だから主人公は、まだまだ欲望をコントロールしつつも、ストレートに応じて、意地悪を言つてやる。

期待に膨れ上がつたいやらしい乳首を、正面から指先でつついてやる。

……何がえっちつて、イヴちゃんのおっぱいは、乳輪が大きめなのがすけべすぎる。  
おっぱいの大きさと乳輪のおつきさは、ある程度比例するらしいけど……。

イヴちゃんのクールな見た目に、Tシャツがぱんぱんに張るほどの巨乳と、淡いピンク  
色のデカ乳輪の組み合わせは、ちょっとえっちすぎるんだよね。

こんなの他の誰にも絶対見せたくないし、生涯わたしが独占しておきたい。  
……本気でそう思っちゃうよ……♥

### ●中央

「【※3回※ 荒い呼吸をする。  
めちゃくちやに興奮して、期待している】

ふーっ。ふーっ。ふーっ……♥

【少し恥ずかしそうに。露骨に興奮した呼吸になつてしまつた事が恥ずかしい】

へへ……そうだよ♥

【嬉しそうに。えっちに指摘されたのが嬉しい。

胸を張つておっぱいを見せつけながら、さらに主人公をあおる。

イヴは主人公におっぱいで遊ばれて、お乳しぼりごつこやエロマツサージごつこされる

が大好き。それらは毎回、ほとんど自分からおねだりしてしてもらっているようなものなのに、やはりあたかも、主人公が悪いかのような言い方をする

勃つちやつてる。

私の乳首。お乳出ないのに先生が毎日吸いまくつたり、引っ張つて、ぴゅつぴゅつする真似したり、毎日エロいマツサージとかしまくるからさあ……♥

普通に寝てて、シャツに擦れただけで勃つし

（主人公）

「へーえ♥」

●中央

〔低く、小さな声で喘ぐ。〕

話ををする最中にも、くりくりと指先で乳首をいたずらされるので】

あ♥

〔甘く切ない声で。もうすでに、とても気持ちいい〕

こんな風にすりすりつてされたら。すぐガチガチになっちゃうの……♥」

（主人公）

「そうなんだ♥ ほんと、どすけべおっぱいだね♥  
大丈夫？ ちやんと日常生活送ってる？」

●中央

「【高く甘い声で喘ぐ。】

主人公がしやべりながら慣れた手つきで、今度は親指で、ぐりぐりと乳首を押しつぶし、乳房に押し込んでくるので】

……あ♥ あ。あつ♥

【ものすごく感じてしまう】

ああつ……♥』

△主人公

「ほんとガツチガチ♥ こんなに硬くなるとかあるの？」

主人公、たつた今胸の内側にたつぶり押し込んであげたはずなのに、もう元の形に戻つて、それどころか、先ほどよりもさらに勃起しているイヴの乳首を、さらに言葉でいじめる。

主人公はイヴと付き合うまで、さほど胸には執着してこなかつた。

大きさを問わずセクシーなものだとは思っていたが、こんな風に積極的に見たり、触つたりする事はなかつた。

でも今では、好きで、性的魅力を感じすぎて困るほどのものになつた。  
だつて、ここを優しく触つたり、少しだけ力を入れてつまんだり、ぐりぐりするだけで、好きな子がこんなに喜ぶのだ。

いつの間にか注目するようになつて、大好きになるのは当たり前だと思つた。

### ●中央

「照れ笑いして。意地悪を言われているのに、すごく嬉しい。

主人公にえつちないとずらをされたり、意地悪に言葉攻めされたりする事がたまらなく  
幸せ】

へへ。硬くてやばい、でしょ。

【とても高く、聞き取りにくくなるほどの声で喘ぐ。

再び勃ち上がつた乳首を、今度は優しく丁寧にカリカリされたので。

意地悪な言葉と優しい手つきのギヤップに、めちゃくちや感じてしまう

あ……つ♥ カリカリされるの、やばいよ……♥

【高い声でゆつくり、静かにガチ喘ぎ。

日常的に乳首いじりをされていて、快感に耐えて長い時間楽しむ事に慣れている感じ】

あ。あ。あ。

【高く甘い声で喘ぐ。

特に気持ちいい愛撫をされたので】

あ♥

【※3回※ 早く、荒く呼吸する。

ものすごく興奮しており、これを抑えようとするが、うまくいかない】

ふーつ♥ ふーつ♥ ふーつ♥

★【※15秒※ 喘ぐ。

あまあまに可愛く、大喜びで喘ぐ。主人公にたっぷり乳首を愛撫されてとても気持ちいい】★★

あ♥ や♥ あーつ……♥ ん♥ ん♥ あ……♥ あ♥ あ♥ うつ……♥

【※1回※ ゆっくり、荒く呼吸する】

はー……♥

【低い声でとろとろになりながら話す。

あまりの気持ちよさに、すでに『主人公が好き』と『気持ちいい』以外の事が考えられなくなってきてている】

せんせえ……すつごいいい……♥

【ほとんど泣きそうになりながら】

おっぱい気持ちいいよう……♥」

〈主人公〉

「ふふ♥ イヴちゃんめっちゃ可愛い…………♥ おっぱいしながらちゅーしょ♥」

●中央

「【※1回※ キスする。ちゅぱつとした、甘々なキス】  
ちゅ♥

★【※15秒※ キスする。

遠慮なしにむきぼられる意地悪なキスに、めちゃくちや興奮しながら応じる】★★  
んつふ♥ んつ♥ んー♥ んんん♥ ん♥ んー……♥ んー♥ んー♥ んーつ  
……♥

【※3回※ 早く、荒く呼吸する。

ものすごく興奮しており、これを抑えようとするが、うまくいかない  
はつふ、はつふ、はつふ……♥

【※3回※ ゆっくり、荒く呼吸する。多少は落ち着く】

はー……♥ はー……♥ はー……♥

【少し間をあけてから。

媚びた甘々な声で。照れ笑いして

へへ。性欲やばい彼女でごめんね……  
昨日もあんなにしたのに。

しばらく出来なかつたとかでも、ないのに……  
先生と居ると、すごい何（なん）か、身体の真ん中、つていうか……  
すぐおまんこの奥、熱くなつちやう……

【※1回※ キスする。ちゅぼつとした、甘々なキス】

ちゅ♥』

〈主人公〉

「じゃあ、おまんこも気持ちよくなろつか♥』

主人公がにやにやとささやくと、イヴが嬉しそうに頷いた。

そのまま快感で潤んだ瞳をきらきらさせて、期待に満ちた目を向けてくる。

その間も胸はたっぷりと露出されていたが、Tシャツはずれ落ちる気配がない。  
胸の上の位置で布が安定するほど、イヴの胸は大きいのだ。

「媚びた甘々な声で。今すぐ絶対セックスして、主人公に甘えたい」

うん♥

だからして♥

【『して』が『ちて』になる】

今日も朝えっちちて♥

【甘々におねだりする】

お願ひ♥

SE6 イヴがベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

イヴが両手を後ろにつき、身体をそらせてさらに足を開いても、それは変わらない。

乳首は相変わらず硬くとがり、その胸はほぼ百パーセント見えたまだ。

その上、今は足の間までよく見える。

これ以上のセックス用ポーズはない。

その、あまりにも扇情的な姿に、主人公はいよいよ欲情を抑えきれなくなつてきていた。

●中央 至近距離

「媚び媚びの甘えた声で。

主人公に濡れた股間を見せるのが嬉しい。イヴには、ごくマイルドな『見せたがり』である】

ほら見て♥

ちゃんと見せるから見て♥

【めちゃくちゃに甘えた声で。小さな女の子が秘密を打ち明けるような感じで】

あのね？ おまんこもね？ やばいの。

【『さつき』とは『主人公が寝ている間、オナニーした後』という意味】

さつきちゃんと、拭いたのに。

【照れて恥ずかしそうに。でも言いたい】

先生と喋つたり、ちゅーしてるだけで、またぐちゅぐちゅになつちやつた……♥

【めちゃくちゃに甘える。小さな子供になつて甘えている気分。一人称が『イヴ』になる】  
ねえだから、して♥ 先生♥

待つてたイヴのおっぱいとおまんこ、気持ちくして……？

【※3回※ キスされる。『いいよ♥』と言われている感じの甘々に口をふさいでくるキス】  
ん♥ んう♥ んー♥

【※3回※ キスされる。舌をゆつくり、ねちねちと絡めるディープキス】  
れろ♥ れろ♥ れろつ……♥

【※3回※ ゆっくり、荒く呼吸する。

興奮が最大値に達している】

はー……♥ はー……♥ はー……♥』

〈主人公〉

「じゃあイヴちゃん、お洋服脱ぎ脱ぎできるかな♥』

●中央 至近距離

「めちゃくちやに甘えた声で。小さな子供になつて甘えている気分】

うん♥ 脱ぐ♥

もつとちゃんとおっぱい出して、おまんこ見せる♥  
裸になつて、えっち用のかっこになるからあ♥』

〈主人公〉

「……♥』

SE7 イヴが服と下着を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

主人公、これから起ころ事を想像するだけで、興奮のあまり、ずきつと頭に甘い痛みが走る。

まだ本格的に触つていなくとも、キスと言葉のやり取りを繰り返して、イヴはここまでとろとろに、従順になつてゐる。

おまけに今、自ら全裸になつて、主人公にすべてを差し出したのだ。

その素直すぎる態度に、主人公はぞくぞくするような征服感に満たされていた。だが、そもそもこの展開は、全てイヴの望み通りだ。

本当に従順なのは、主人公の方だと言つていい。

じやあ、わたしも思いつきり素直に、イヴちゃんの好きなようになつてあげないとな。

主人公はそんな事を思いながら、大きく深呼吸した。

### ●中央　至近距離

【※4回※　とろとろの甘い息を漏らす】

はあ、はあ、はあ、はあ……

【少し早口で、めちゃくちゃに甘えた声で。

小さな子供になつて甘えている気分。

『ここ』つまり性器を指で開いて『ここに指を挿入して気持ちよくしてほしい』とおねだりしている

ほら見て♥ ここ、真っ赤になつてるのわかるでしょ？

『欲しいよー』ってぱくぱくしてるの、わかるでしょ？

〈主人公〉

「えー？ 見えないなあ。

もつと開かないとわかんないかも♥」

だから、もう一押しだ。

主人公としては、ここでがつついてもいい。正直な所、もう焦らさないでいじめたい。

だが、それではイヴは物足りないだろう。

イヴは根っからのすけべでど変態だ。その上、そんな自分を全部見せてくれるほど、主人公を信頼してくれているのだから、中途半端ではいけない。

なので主人公は、もちろん全部見えているのに、しつと嘘をつく。  
もつとイヴに過激な格好をさせて、愛情を確認し合つて、過激なセックスがしたいからだ。

●中央

「めちゃくちやに甘えた声で。小さな子供になつて甘えている気分。

見えていないはずないと理解した上で、喜んでもつと過激な格好をしようとする

嘘♥ うーそ♥ 絶対うーそ♥ 見えてるでしょ♥

『もつと開かないとわかんない』とかありえないから♥』

S E 8 イヴが自分の股間をさらに広げて、主人公に見せる音

【最初から最後まで流す】

【少し大きめの音量で流す】

当然イヴも、その要求に喜んで従う。

イヴは膣内を見せつけて喜ぶ露出癖だから、今自分の性器がどんな事になつてゐるか、本当は話したくて仕方ないに決まつてゐると、主人公が確信していた通りになつた。

●中央

【媚びた声でもどかしそうに。

先ほどまで焦らしているのは自分だつたはずなのに、いつの間にか、すっかり自分が焦

らされている】

ほら♥ ここ♥

【指で性器を開いて、ここに指を入れてほしいとおねだりする】  
先生が指入れるとこ、ここ♥】

〈主人公〉

「えつわかんない♥ どこかな♥」

なので主人公はもつとイヴに近づいて、欲望でぐちゅぐちゅに濡れた性器を覗き込んで、それでもなお、わからないふりをする。

実際そこは深すぎて、容易には触れない。もう少し解説してもらえるとありがたいのだ。

● 中央

「必死に、甘々に媚びた声で。

大喜びで、ノリノリで、今性器がどうなっているかを解説する。

『ぬるぬるとろつて』は『ぬるぬるが、とろつて』の略

この♥ ぴらぴらつてなつてるピンクのとこの奥♥

指と指で開いてる、ぬるぬるとろつて出ちゃつてるとこ♥

【一呼吸おいてから。

【ここから※マークまで、興奮のあまり少しづつ早口になる。

媚び媚びに、甘々に挿入をおねだりする】

ここ♥ ここに先生のほしいの♥

先生のお指出し入れして、Gスポートんとんしてほしいの♥

【ここから※マークまで、さらに必死に、甘々に、媚び媚びになる】

お願い♥

ねえお願い♥

【『ハメハメしてお願い♥』は『挿入してほしいです、お願ひです♥』という意味で、区切  
らずに一気に言う。

『こやつて』は『こうやつて』の略】

ハメハメしてお願い♥

いつもみたく仰向けで足自分で開いて♥ こやつておまんこ見せるからあ♥

ハメハメして下さい♥ お願い♥】※

S E 9 イヴが仰向けに寝転がる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

そこで、とうとう焦れたのか、イヴが自分から仰向けになつて、自分の手で足を持つた状態で、大きく開いた。

主人公はこれにぞくぞくしながら、ようやく言う事を聞いてあげる。

それにしても、普段、人を変態扱いしてからかつてくる女の子のどすけベポーズは最高すぎる。

カメラに収める事はできないので、このように、定期的に直接見せてもらう事にしよう。

（主人公）

「いいよ♥」

S E 1 0　主人公がイヴの性器に挿入する音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

●中央

【高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で。  
これから挿入されるのがとにかく嬉しい】

あつ  
♥

SE11　主人公がイヴの股間を愛撫する水音1

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

【0～1秒ほどまで流してセリフ】

【▲1　で音量が一段階大きくなる】

【▲2　で速度が一段階早くなる】

【▲3　で速度がさらに一段階早くなる】

【そのまま、▲4　まで流し続ける】

●中央

「興奮して、大喜びで。

主人公の指が膣口にあてられたので】

ん♥

【低くうめくように喘ぐ。指が挿入され始めたので】

あ。

【高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で。  
挿入されるのがとにかく嬉しい】

ああっ♥

【とても低い声で濁音喘ぎする。めちゃくちや気持ちいい】  
う。

"あつ……♥

【※4回※ ゆっくりと呼吸する。膣内の甘い圧迫感に耐えている。  
いきなり気持ちよすぎて、何とか耐えようとする】

ふう……ふう……ふう。ふう……♥】

▲1 ここでSE11の音量が一段階大きくなる。

●中央

「【高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で。  
挿入されるのがとにかく嬉しい】

あつ♥

【とても低い声で小さく喘ぐ。

さらに指が深く入ってきたので、とにかく嬉しい】

あつ。きた。きたあ……

【少し間をあけてから】

入つてきたあ……

【低く濁音喘ぎする。ものすごく気持ちいい】

”あ。

【とても低い声で濁音喘ぎする。めちゃくちや気持ちいい】

”あ。”あ……。

【※3回※ ゆっくりと呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はあ……はあ……はあ……

【※3回※ ゆっくりと呼吸する。

快感に必死で耐える】

ふう……ふう……ふう……。

【低くうめくように喘ぐ。指がとても気持ちいいところに、的確に収まつたので】

ああつ……

【甘々に、とても嬉しそうに】

せんせえ……気持ちいい……

すっこいい……

【※3回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はあ、はあ、はあ。

【※3回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はー、はー、はー♥】

〈主人公〉

「動かすよ♥」

●中央

「[甘々に媚びた声でおねだりする】

うん♥ ぐちゅぐちゅつてしてえ♥】

▲2 ここでSE11の速度が一段階早くなる。

●中央

【低く濁音喘ぎする。最高に気持ちいい出し入れが始まったので】

〃あ♥

★【※30秒※】低い声で、ゆっくりめのテンポでかわいく濁音喘ぎする。

声は最初は低く、だんだん高く、あまあまになる。

最初は同じテンポで、だんだんテンポが乱れる感じで、とろつとろになつて喘ぐ。主人公に好きなセックスを完全に把握されており、ものすごく気持ちいいテンポで、的確に出し入れされている感じで】★★★★★

“あ。”“あ。”“あ。

“あ。”“あつ♥”

“あー。”“あつ。”“あ

“あ♥”“あ♥”“あ♥”

“あつ♥”“あつ♥”“あつ♥”

“あ♥”“あ♥”“あつ♥”

“あーつ♥”“あーつ♥”“あああ……つ

“あーつ♥”“あーつ♥”“あああ……つ♥”

【※6回※】早めに呼吸する。

【ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふ……♥

【低くうめくように喘ぐ。『お』段の喘ぎが混じつてくる。

ものすごく気持ちいい。相変わらず、完全に快感を管理され、激しすぎないペースで、

出し入れされているので】

あつ。あつ。あ。おつ。

あつ、あつ♥ あつ♥ おつ♥

あつ♥ あつ♥ あ♥ あ♥

【低く『お』の段で喘ぐ。気持ちよすぎて、軽くあへあへし始めている】

お。お♥ お♥ おおつ……♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

出し入れされながら、なんとか喘ぎをこらえる感じ。ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふつ……♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

ふーつ、ふーつ、ふーつ。

ふーつ♥ ふーつ♥ ふーつ……♥】

イヴ、仰向けになつて、主人公に一方的に気持ちよくされながら、いつしか夢中で腰を振り始める。

みつともなくがに股になつて、そのくせ口元は、恥ずかしそうに手で隠しながら。

目を潤ませ、おっぱいをゆさゆさと揺らしながら、快樂に耽つてゐる。

主人公は最高の氣分だ。この光景を、毎日でも見たいと思つた。

### ●中央

「うわごとのように。あまりにも氣持ちはすぎて】

せんせえ……氣持ちいいよお……♥

氣持ちい、氣持ちい、氣持ちい……♥

【甘々な声でうわごとのように。氣持ちはすぎて、訳が分からなくなつてくる。  
主人公にも答えようのない質問を、そうとわかつていてする】

先生の何で？ 何で奥届くの？

長さ、私のとあんま変わらないのに♥

何でイヴじや届かないどこ入るの？

【※2回※ 甘々に喘ぐ】

あつ♥ あつ♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふつ……  
うあ



【低く『お』の段で喘ぐ。

気持ちよすぎて、軽くあへあへし始めている】

おつ。お♥ おおつ……  
♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

そろそろイキそう】

はー♥ はー♥ はー♥

はー♥ はー♥ はー……  
♥

【高くとろとろの声で喘ぐ。『先生』が『しえんしええ』になる】

ああああ……  
♥

しえんしええ……  
♥

【少し早口で、甘々の声で。もうまつたく余裕がない】

やばい。やばい。やばいの。

【2個目だけイ『ぐ』になる】

いく。いく。いく。もういく♥】

▲3 ここでSE11の速度がさらにもう一段階早くなる。

●中央

「★【※20秒※】低い声でかわいく濁音喘ぎする。

声は最初は低くゆつくり、だんだん高く早くなる。

先ほどよりも余裕なく、思いつきり乱れる感じで、とろつとろになつて喘ぐ。

主人公に好きなセツクスを完全に把握されており、ものすごく気持ちいいテンポで、的

確に出し入れされている感じで】★★★

“あ。”“あ。”“あ。

“あ。”“あ。”“あーつ……”

はあ、はあはあ、あ

“あつ♥”“あつ♥”“あー……”

“あつ♥”“あつ♥”“ああああ

“あーつ♥”“あーつ♥”“あああ……”

【特に気持ちいいところに当たつて】

“あー……”

【甘々な声でうわごとのように。必死で、絶対伝えたい事を連呼する】

先生。好きつ、好きつ、好きつ……

気持ちい、気持ちい、気持ちい……

【特に気持ちいいところに当たって。もうイきそう】

“あー……♥”

【『先生』が『しょんしょん』に、『好き』が『しゅき』になる】

しょんしょんしゅき♥ しゅき♥ しゅき♥

【3個目だけイ『ぐ』になる】

もういく。いく。イぐつ♥

【思いつきりガチイキ】

あああああああ……♥

▲4 ここでSE11がフェードアウトする。

SE12 イヴがベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「…………♥」

ここで、イヴが絶頂する。

主人公はそれを満たされた気持ちで見下ろしながら、でも優しく、注意深く彼女を観察する。

イヴは一度びくん、びくんと大きく震え、目を涙でぐちやぐちやにして快感の余韻に浸っている。

それは一見ぐつたりしているように思えるが、主人公は知っている。この感じなら、まだ元気そうだと、これまでの経験で理解しているのだ。

そう。イヴには結構持久力がある。あるからこそそのセックス大好き女子なのだが、おかげで主人公は『持久力に優れた女性』と聞くだけで、なんだかえつちな気分になるようになってしまった。責任を取ってほしい。

だから、そんなイヴがこれからどうしてほしいのか、主人公には手に取るようにわかる。先ほど語った妄想のように『がっつり犯されたい』のだ。

それはもちろん、一回イッた程度では『がっつり』判定されない。  
それなら……。

●中央

「※6回※ 早めに呼吸する。  
ものすごく気持ちいい」  
はー♥ はー♥ はー♥

ふーっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥

【※3回※ 少しゆつくり目に呼吸する。  
少し落ち着いてくる】

ふー……♥ ふー……♥ ふー……♥』

主人公、ベッドに仰向けになつたままえつちな息を漏らすイヴに再び覆いかぶさると、  
そのまま、再び指を挿入する。

ぐちゅぐちゅにほぐれた膣の感触が指に伝い、それらがすぐさままた絡みついてくる。

S E 1 3 主人公が再びイヴの性器に挿入する音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

【0—1秒ほどまで流してセリフ】

【▲5 で速度が一段階早くなる】

【▲6 で速度がさらに一段階早くなる】

【そのまま、▲7 まで流し続ける】

● 中央

【再び挿入されて驚く。】

不意打ちだったので驚きの方が勝るが、本心では待ち望んでいた展開。嬉しくてたまらない。先ほどの妄想の通り、イヴは主人公に犯されたい願望がある】

“あつ……!?”

【※3回※ 『犯され感』強めに喘ぐ。】

とても嬉しいが、まだ状況を理解できていない】

あ。あ。”あつ

【あからさまに期待しつつ、驚いて『待つて』としか言えなくなる。】

でも、本当はこのまま犯される事にものすごく興味がある】

待つて。先生。イツた。イツたからあ

♥

【早口で必死に。】

でも、どんなに抵抗しようと、このままもう一回イカされる事を理解している。また、ぜひそうなつてほしい】

だめだめだめだめ、だめ

♥】

▲ 5 ここでSE13の速度が一段階早くなる。

●中央

【低い声で小さく、でもガチ喘ぎ。  
期待感と被虐心で、滅茶苦茶に感じてしまう】

"あー……つ♥

★【※30秒※ 低い声でかわいく濁音喘ぎする。

声は、最初は低く、だんだん高くなる。

まつたく余裕がなく、一方的に気持ちよくされる。

これまでよりも激しく、めちゃくちやにされている。

でも、それが嬉しいし、これを待っていたという感じで】 ★★★★☆

"あつ。 "あつ。 "あ。

"あつ。 "あつ。 "ああつ……つ♥

"あー。 "あつ。 "あー……

"あー……♥ "あー……つ♥ "ああああ♥

"あつあつあつあ♥ "あつ♥ "ああつ♥

"あ♥ "あ♥ "あつ

"あーつ♥ "あーつ♥ "あああ……つ♥

【甘々媚び媚び声で。一見やめてほしい風だが、『先生』が『しえんしええ』、『やだ』が『やら』になる】

しょんしょん……♥ 深い。深い。"あ。やら♥  
凄いの来ちゃう、やだ、やだ♥ やら♥

【低い声で濁音ガチ喘ぎ。

期待感と被虐心で、滅茶苦茶に感じてしまう】

あつあつあつあつ。"あ。"あ♥ あ、"あ♥  
やばい。やばい。やばいから♥

【低い声で濁音ガチ喘ぎ。

一回一回が深く、重たく、めちゃくちゃ感じているイメージ】

"あ♥" "あ♥" "あ♥" "あつ♥"

S E 1 4 主人公がイヴにさらに深く覆いかぶさる音

【最初から最後まで流す】

▲ 7 ここでS E 1 3の速度がさらにもう一段階早くなる。

主人公、挿入した指全部で膣の感触を楽しみながら、舌を見せて、イヴにもそうするよう無言で促す。

そしてイヴがそれを理解するかしないかのタイミングで、もう唇を奪い、キスしながらしつかりと攻める。

●中央　至近距離

「★【※30秒※】　キスで口をふきがれながら喘ぐ。

キスは一方的で、攻められているイヴはうまく応じられないほど。

イヴはそんな『ラブラブにキスされながら、でも容赦なく攻められる』という最高のチュエーションに、めちゃくちや興奮し、大喜び。

これまでよりも激しく、めちゃくちやにされている。

でも、それが嬉しいし、これを待つていたという感じで一★★★★★

んーつ♥　んつ♥　んつ♥　んつ♥　んー……♥　んつう♥　んつ♥　んつ♥　んつ♥　んー……♥

【ガチイキする】

んんんんんう……つ♥』

S E 15 イヴがどさつと倒れる音

【最初から最後まで流す】

イヴ、あつという間にまたイツてしまう。  
再びベッドにぐつたりと倒れ、体力こそまだあるが、今度は欲求が想定以上に満たされ、  
感激して動けなくなっている。

### ●中央　至近距離

【※4回※　めちゃくちゃに荒い呼吸をする。

氣持ちよすぎて、イキすぎて、息も絶え絶え】

はーひゅう、はーひゅう、はーひゅう、はーひゅう……

【※6回※　めちゃくちゃに荒い呼吸をする。

しかし、ひとつ前よりは息が整う】

はあ、はあ、はあ  
はあ、はあ、はあ

【※1回※　キスされる。

甘々な優しい、ちゅぽつとしたキス】

ちゅつ♥

【甘々に抗議する。本当は、もちろんされたかった】

もお。ダメって言つたのにい……

【※3回※　キスされる。

今度は抗議を無視した、有無を言わせないキス】

ん♥ んつ♥ んーつ♥

【甘々に、にやにやと。本当は、もちろんとても嬉しい】

変態先生。やばかつたあ……♥

こんなの♥ 私の嘘の話と変わんない位エロいじやん……♥】

〈主人公〉

「うん♥ そうだよ♥ 変態だから変態セックスしたかったの。  
ねえ。イヴちやんがおっぱいゆさゆさせながら腰振つてるの、最高だつた  
すつごい可愛かつたよ♥」

主人公、にやにやしながら素直に感想を述べ、イヴを照れさせてやる。

元はと言えば、直球すぎる言葉に困らされ、恥ずかしくなつていたのは主人公の方だつた。

なので、付き合い始めて、やつと反撃できている気分である。

●中央 至近距離

【呆れている振りをしつつとも嬉しい。この言葉を聞きたかった】

はあ……♥

【甘々に抗議する。本当は、もちろんされたかった】

本当に恥ずかしい奴、好きなんだから。

【あからさまに声がうきうきしている。とにかくこれが最高だったの

ダメって言つてるのにもう一回イかせるの、大好きなんだから♥

【少し間をあけてから。甘々に念を押す】

ねえ。先生とこんな変態セックスできるの、絶対私だけだよ♥

一生していいから、絶対私とだけしてね♥

〈主人公〉

「もちろん♥」

●中央 至近距離

【※3回※ キスされる。

『もちろん』という気持ちを伝える、甘々なキス】

ん♥ んー♥ んーつ……♥

【上機嫌で】

ふふふふ♥ 先生大好き♥】

〈主人公〉

「わたしもイヴちゃんしゅき♥ しゅき♥ だーいしゅき♥」

●中央 至近距離

【上機嫌で】

えー♥ 私はもつと好きだからあ♥』

〈主人公〉

「えー♥ わたしのがもつともつと好きだからあ♥』

こうして二人は早朝から濃厚セックスを終え、主人公は『まだ時間も早いし、これからもうひと眠りかな』と楽観視していた。

しかし、イヴの欲望は果てがなく、主人公の想像を時に凌駕する。

イヴは主人公にたつぶりと『好き』をプレゼントされて満足したかと思うと、今度は次の要求を放ってきた。

●中央 至近距離

〔上機嫌で、にやにやと〕

でさあ……  
♥

さつき先生、何でも言う事聞いてくれるって言つたよね……  
♥

〔主人公〕

「うん♥ 何でも言つていいよ♥」

しかし主人公は、まだ事の重大さを理解していない。

イヴちゃんにおねだりされるのなんていつもの事だ！  
約束したし、今日も、なんでも聞いてあげよう♥

などと、完全に油断している。

●中央 至近距離

〔上機嫌で、にやにやと〕

じやあ、ちょっと聞いてもいい？」

〈主人公〉  
「うん？」

SE16 紙を見せる『びらつ』という音

【最初から最後まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

〈主人公〉

「…………！」

だが『それ』を見た瞬間、主人公の目は点になり、口は呆然と半開きになる。

とはいっても、大した事ではない。見つかったところで大罪などではない。

だが、主人公は苦境に立たされた。

それは、バレてしまつたらバレてしまつたで仕方ないが……できる事ならバレたくない事柄だつたからである。

なので主人公は、

——なぜ!? これは一体、どうやつて流出したというの!?

と心の中でおののいてみるが、それすら長くは続かない。

『机の上に置いてあつたのが落ちて、それをたまたまイヴが発見した』  
それ以外の可能性は、まずなかつたからである。

### ●中央　至近距離

「【にやにやと嬉しそうに。ちつとも怒っていない】  
さつき見つけたんだけど。

【一呼吸おいてから。にやにやと】

これ♥　なーに?」

対するイヴは、嬉しそうににやにやしている。

どうやら今日はこれから、この紙を使って遊ぶつもりのようだ。  
では、その紙には何が書かれているのかと言うと、それは……。

とあるものの、購入記録である。

ここでフェードアウトして終了。